

The investigation into sexual problem for children in adolescence (Part 1) : conversation about sex between parents and children, and the way to get the information about sex

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/24783">http://hdl.handle.net/2297/24783</a>

# 思春期の子どもの性に関する研究 第1報

## —性に関する親子の会話と性情報の入手について—

竹俣 由美子 木村 留美子\*

### 要 旨

子どもたちの実態に見合った性教育のあり方を検討するために、石川県A町の思春期にあたる小学校5,6年生と中学生、その保護者、および小中学校の教員を対象に、性に関する意識調査を行った。子どもたちは学年が上がるにつれて家族と性に関する話をしなくなり、その傾向は男子の方が顕著であった。性の話を意識的に行う親は、小学生で約1割、中学生になると3割弱であった。いずれも、女子の親の方が多く話をしてきた。性に関する情報の入手は、小学生の間は親や授業から得ていた。中学生になると友だちから得る割合が増えていた。しかし、親は子どもたちが性に関する情報を友だちや本・雑誌から得ていると考えている割合が多く、親子の間に、認識のズレがみられた。教師は子どもたちが本・雑誌、友だち、テレビやインターネットから性に関する情報を得ていると考えていたが、インターネットから性に関する情報を得ている子どもはほとんどいなかった。また、子どもがインターネットから性に関する情報を得ていると考える小中学生の親は1割以下であった。

### Key words

Sex education, Adolescence, Parents, Teacher,  
Conversation between parents and children, Information about sex

### はじめに

近年、子ども達の性行動の低年齢化や性行動が深まる期間の短縮化が指摘されている<sup>1)</sup>。高校3年生での性交経験率は男子35.7%、女子44.3%との報告もある<sup>2)</sup>。性に関する知識が不十分なまま性交体験が進めば、性感染症や望まない妊娠及び妊娠中絶のリスクが高まる可能性は大きい。人工妊娠中絶率(女子人口千対)は、平成元年の総数が14.9であるのに対して20歳未満は6.1、平成15年の総数11.2に対して20歳未満は11.9と20歳未満の中絶率は約2倍に増加し、全中絶数の13.0%を占めている<sup>3)</sup>。性感染症については、クラミジア陽性は全体分娩が3.5%であったが、10代で分娩した者は20.4%と有意に高い率が報告されている<sup>4)</sup>。このような現状についてHIV感染症/エイズの関連で専門家や関係者はさまざまな問題提起を行っているが、まだ世論を動かす程の力とはなっていない<sup>5)</sup>。

10代の妊娠中絶に関しては、10代妊娠の70%近くが人工妊娠中絶を受けているとの報告<sup>3)</sup>や、10代妊娠者の分娩例の10.2%が中高校生で、中絶例では47.8%が中高校生であるとの報告もある<sup>6)</sup>。さらに、10代妊娠の82%が避妊を行っておらず<sup>7)</sup>、10代妊娠者のパートナーの有職状況を分娩例からみると84.7%が定職者であるが、中絶例では30.4%である<sup>7)</sup>ことから、中高校生または無職の若者同士の避妊しない性交から生じる望まない妊娠や中絶などの姿が浮かび上がる。このような避妊意識や正確な避妊方法の知識の欠如は、望まない妊娠を反復する結果となり、早い時期からの性教育の必要性を痛感すると共にこのような問題を広く社会に訴える必要があると考える。

そこで、本研究ではこのような子どもたちの実態に見合った性教育のあり方を検討するために、石川県A町の思春期にあたる小学校5,6年生と中学生、

金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻看護科学領域博士後期課程、金沢市立諸江町小学校  
\* 金沢大学医薬保健学域保健学類

表 1. 調査対象

			回収数	回収率(%)	
小学生	5年生	男子	149	282	96.6
		女子	132		
		不明	1		
	6年生	男子	142	288	98.0
		女子	146		
		不明	0		
中学生	1年生	男子	154	272	92.8
		女子	116		
		不明	2		
	2年生	男子	135	276	93.9
		女子	139		
		不明	2		
	3年生	男子	150	282	95.2
		女子	131		
		不明	1		
保護者	小学校		1146	76.0	平均年齢 38.3±4.92
	中学校		614	69.5	42.4±4.17
教師	小学校		96	95.0	勤務年数 18.7±10.8 (1~38年)
	中学校		48	84.2	17.8±10.4 (1~45年)

その保護者、および小中学校の教員を対象に、性に関する意識調査を行ったので報告する。

## 対象と方法

### 1. 調査対象

A町の小中学校に在籍する小学5年生292名のうち回収数282名(回収率96.2%)、小学6年生294名のうち回収数288名(回収率98.0%)、中学1年生293名のうち回収数272名(回収率92.8%)、中学2年生294名のうち回収数276名(回収率93.9%)、中学3年生296名のうち回収数282名(回収率95.2%)である。小学校保護者1507名のうち回収数1146名(回収率76.0%)で平均年齢は38.3±4.9歳、中学校保護者883名のうち回収数614名(回収率69.5%)で平均年齢は42.4±4.17歳である。小中学校の教員158名のうち回収数144名(回収率91.1%)である。(表1)

### 2. 調査方法

#### 1) 調査方法と内容

調査は、齋藤ら<sup>8)</sup>の性に関する親子の会話の調査や町田ら<sup>9)</sup>の小学生とその保護者への調査を参考に調査用紙を作成した、自記式質問紙法による実態調査である。

質問内容は、小中学生には、思春期でのからだや心の変化について、「だれと話すか」、「どのようなことを悩んでいるか」、「情報をどこから得るか」につ

いてである。「どのようなことを悩んでいるか」、「情報をどこから得るか」については複数回答可とした。保護者には「子どもと性に関連した話をするか」「子どもたちは性に関する情報をどこから得ていると思うか」「学校で行われている性教育に関心はあるか」「学校で性教育を行って欲しいか」についてである。「子どもたちは性に関する情報をどこから得ていると思うか」の項目については複数回答可とした。教職員には「子どもから性に関する相談を受けたことはあるか」「子どもたちは性に関する情報をどこから得ていると思うか」「思春期の問題や性教育のあり方についての意見」である。「子どもたちは性に関する情報をどこから得ていると思うか」の項目については複数回答可とした。

調査期間は平成20年11月の1ヵ月である。

### 3. 分析方法

統計的解析にはコンピュータソフト SPSS for Windows Ver. 12.0を使用し、割合比較には $\chi^2$ 検定を行った。自由記述については研究者間で内容を検討し、カテゴリーごとの分類を行った。

### 倫理的配慮

調査全体は石川県A町の次世代育成プランの前期5年分の評価と後期行動計画に向けての提言を行うための受託研究であり、本研究はその一部である。

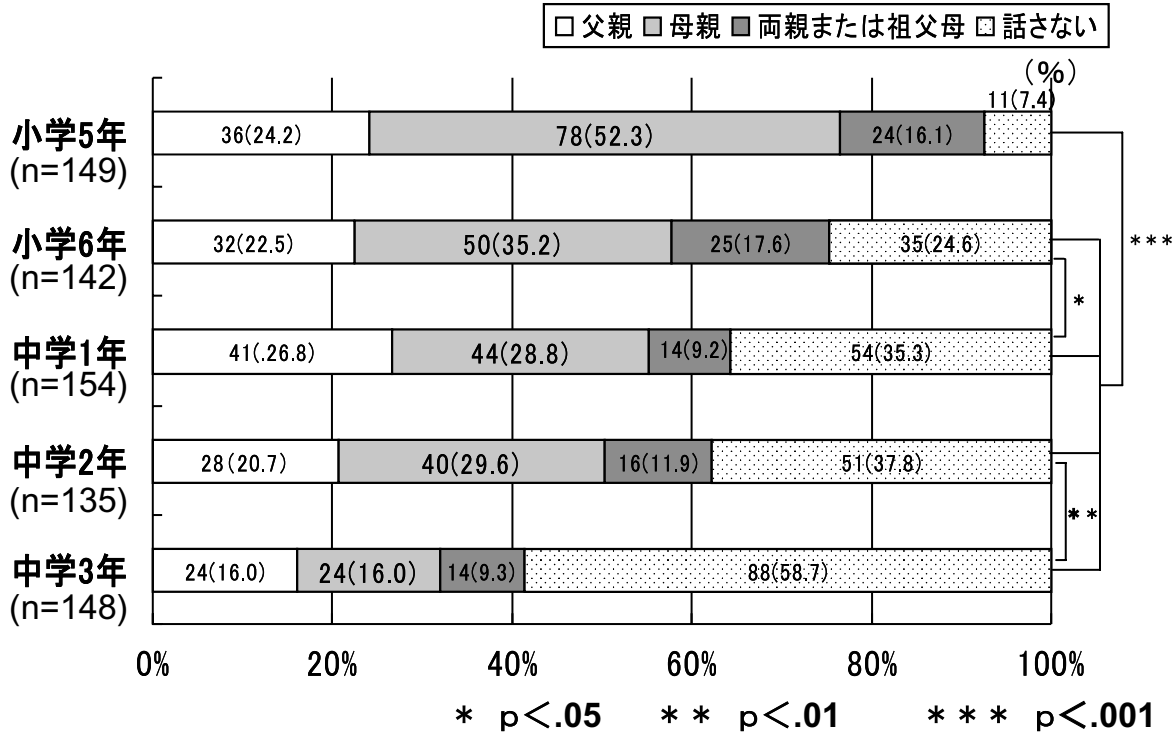


図1. 性に関する親との会話 (男子)

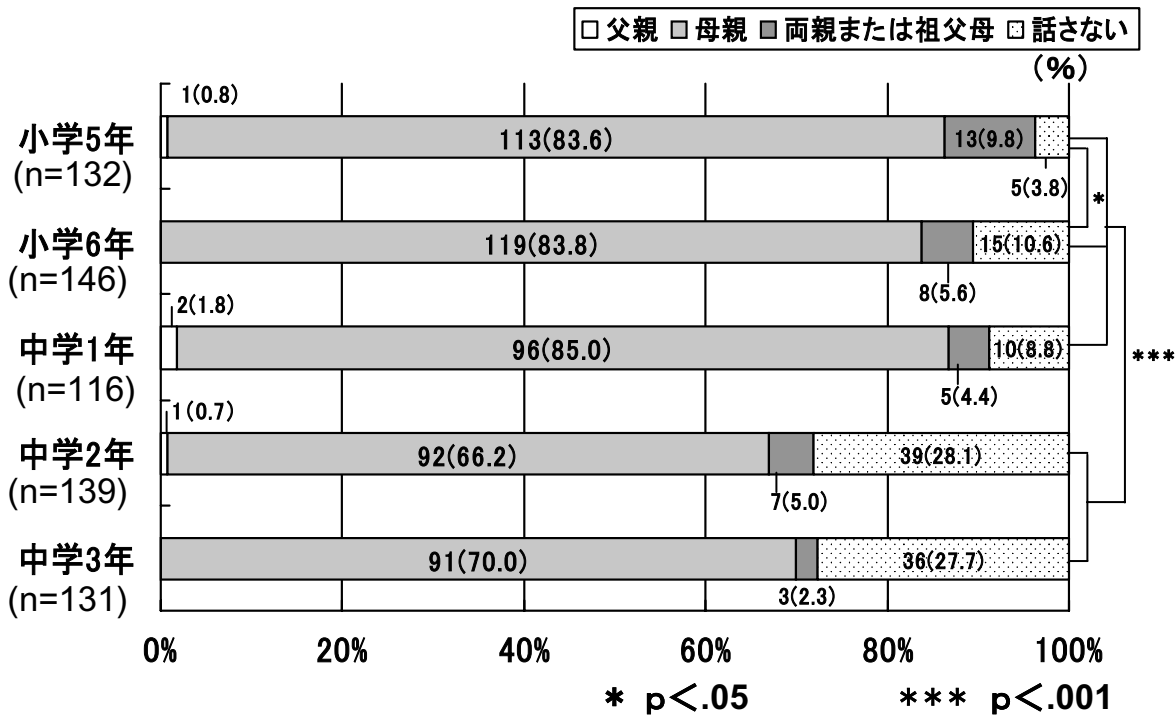


図2. 性に関する親との会話 (女子)

したがって対象者への依頼はA町と研究者の両者によって行った。

調査への同意は、各対象者に対して、回答は自由であり、回答の有無によって不利益が生じないこと、また質問紙への回答は無記名でありデータは統計的に処理され個人や学校が特定されることはない

こと、データは本研究室の鍵のかかる棚に厳重に保管され、研究終了後は粉砕処分されることを書面で説明した。小中学校の児童生徒は学校の学級指導の時間に記入し、回答の自由が保障されるように担任教師に対して回答場面を見ないように依頼した。記入後は封筒に入れ封をして回収を行った。保護者へ

の質問紙は児童生徒に持ち帰らせ、記入後は封筒に入れて封をして回収した。教員も封筒に入れて学校で回収した。いずれも個人が特定されないように、密封のままA町を通して回収し本研究室で開封した。

結 果

1. 性に関する親との会話

1) 男子が性に関する親との会話について (図1)

男子では学年が進むごとに性に関して親と会話する者が減少し、特に中学3年生は親と話さない者が増加していた ( $\chi^2=109.18, df=12, p<.001$ )。

性に関することを父親と話す者の割合は学年を通して大きな変化はみられず、20%程度であった。母親と話をする者は、小学5年生が最も多く、学年が進むにつれて減少し、家族の誰とも話さない者の割合が有意に増えていた。

2) 女子が性に関する親との会話について (図2)

女子では父親と話する者はほとんどおらず、母親とは学年を通して多くの子どもが話をしてきた。しかし、中学2年生以降ではやや減少し有意差がみられた ( $p<.001$ )。

3) 親が子どもと性に関する会話について (図3～7)

保護者の回答は父親110名 (6.2%)、母親1664名 (93.3%)、祖父母等9名 (0.5%) で、回答のほとん

どは母親からであった (図3)。

親は第一子の子育ての場合には、あらゆることを子どもと共に初めて経験することになるが、第一子が小学校低学年の親は子どもと性について話をしていない者は6.4%、高学年の親は13%、中学生では28.6%、高校生では25.8%と第一子の学年が高くなるにつれて話をしない者の割合は減少していた ( $\chi^2=105.04, df=6, p<.001$ ) (図4)。小学生の親と

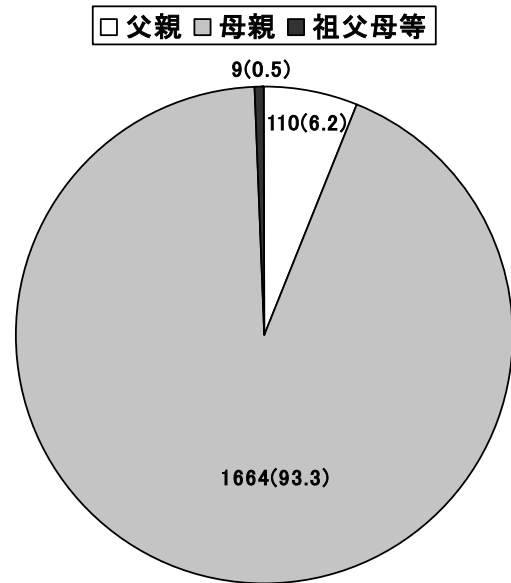


図3. 保護者の子どもとの続柄

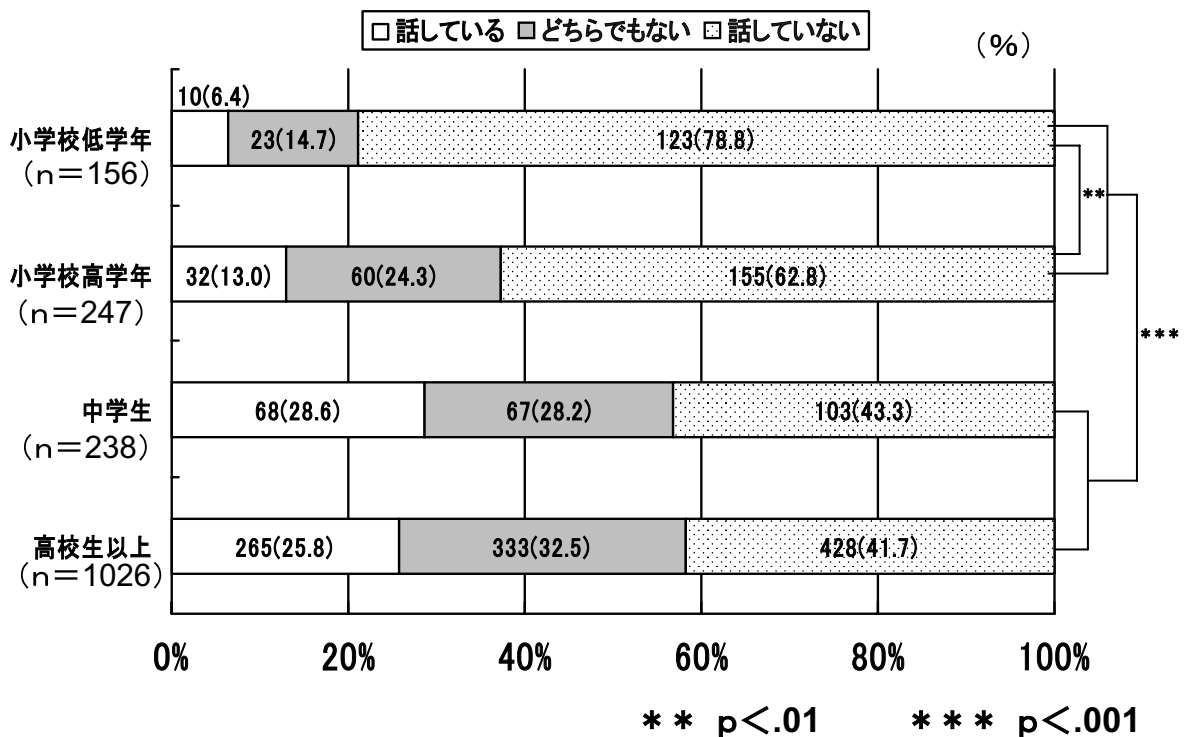


図4. 第一子の年齢と性に関する親子の会話

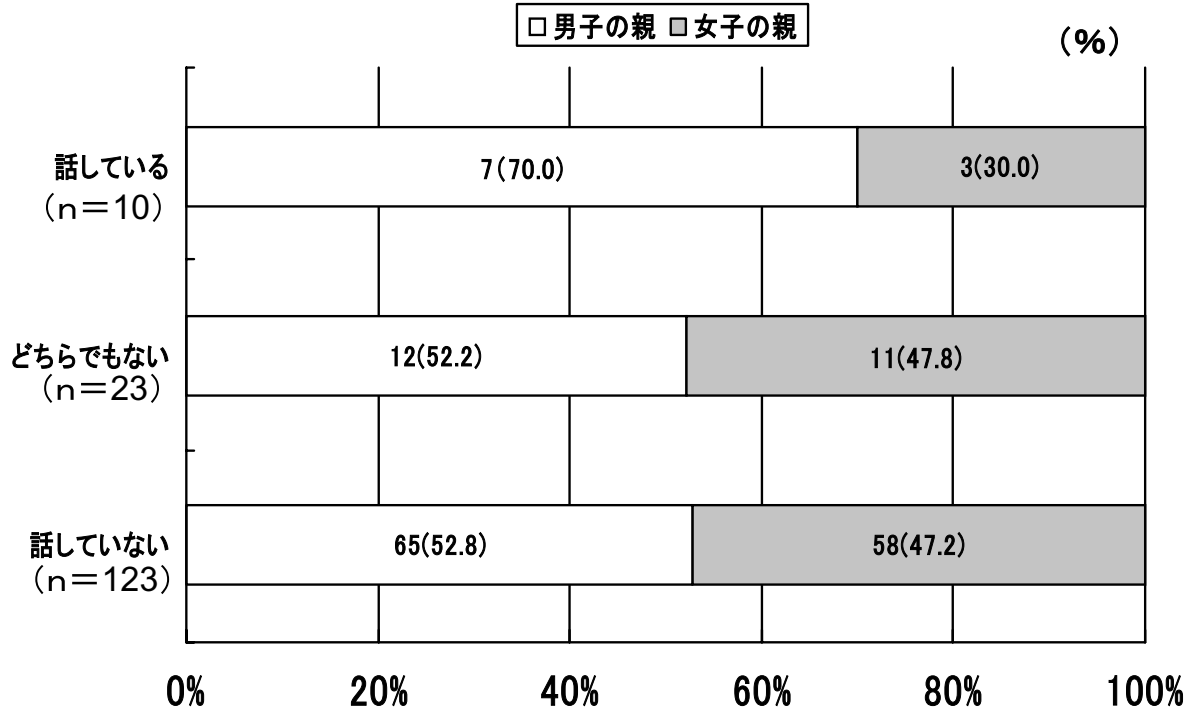


図5. 性に関する親子の会話 (第一子が小学校低学年の親)

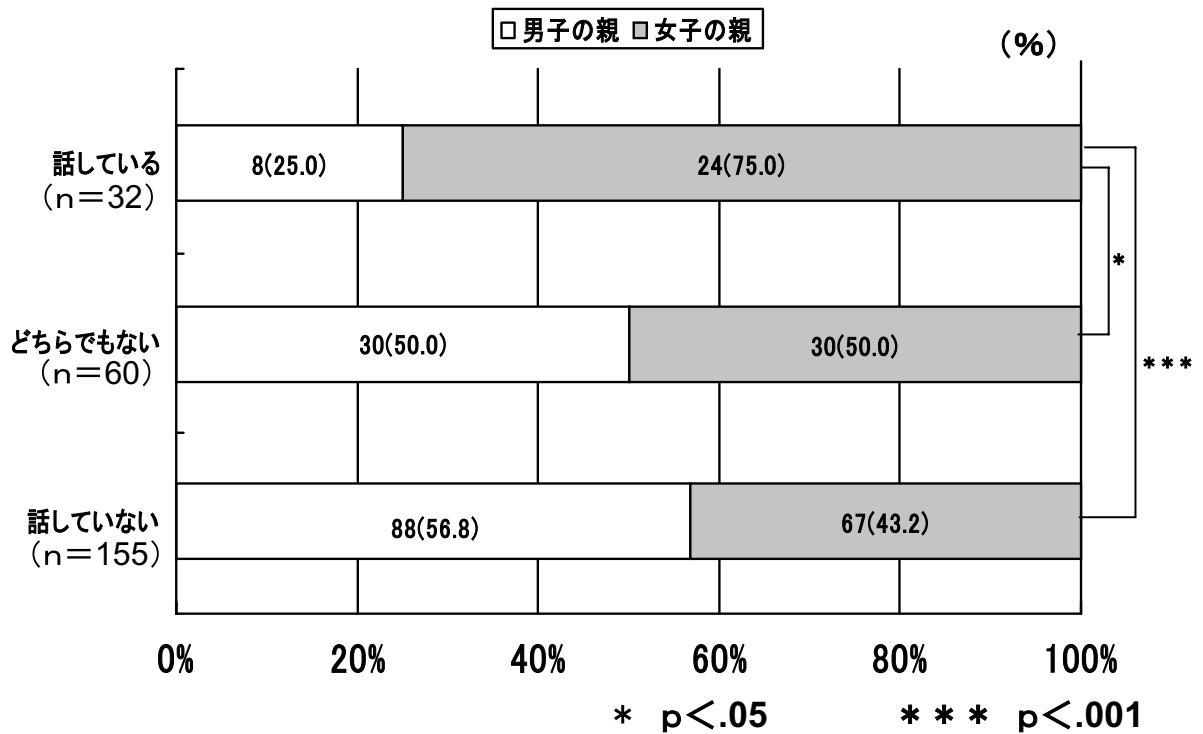


図6. 性に関する親子の会話 (第一子が小学校高学年の親)

中学・高校生の親の間には有意差がみられた ( $p < .001$ )。これを子どもの性別で比較すると、小学校低学年の親では有意差はみられなかった(図5)。小学校高学の子の親は話をするものが多く有意差がみられた ( $p < .001$ ) (図6)。中学生の親では、話

す者とどちらでもないと回答した者の間に男女間の有意差はみられなかったが、話をしないと回答した者は男子の親に多かった ( $p < .05$ ) (図7)。高校生の親では子どもの性別による違いはみられなかった(図8)。

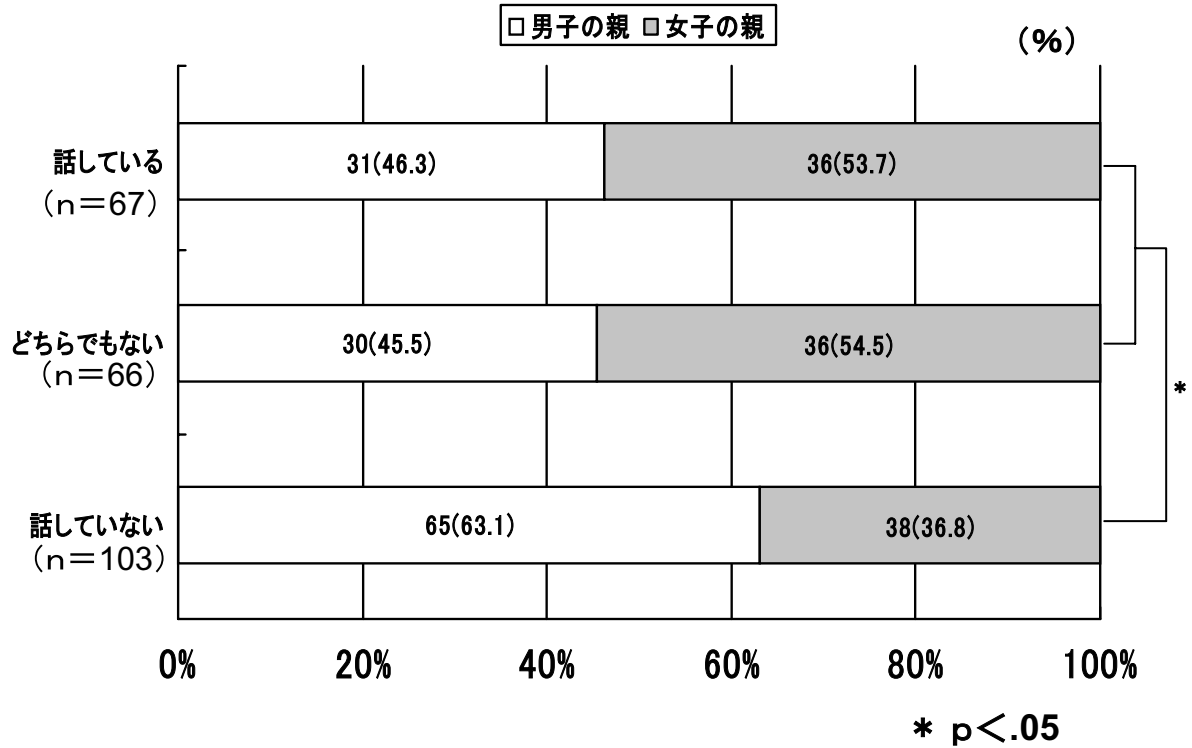


図7. 性に関する親子の会話 (第一子が中学生の親)

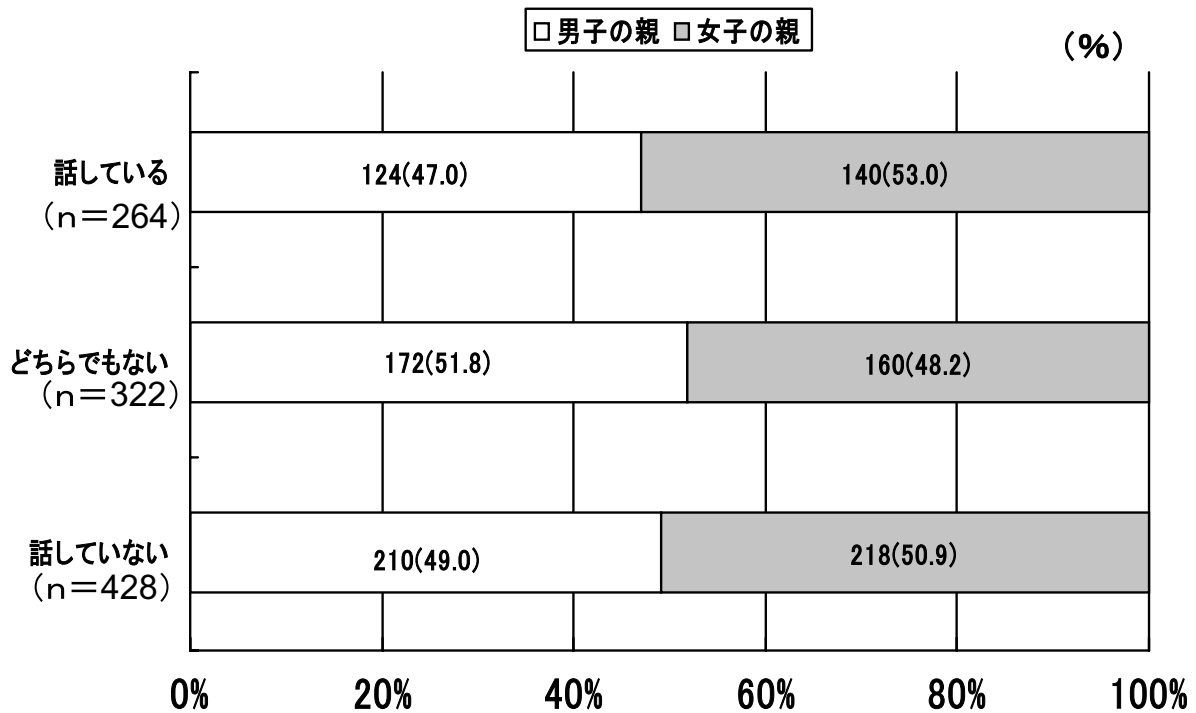


図8. 性に関する親子の会話 (第一子が高校生以上の親)

2. 性情報の入手方法について

1) 男子の性に関する情報の入手源 (図9)

性に関する情報の入手源では5年生の男子は、母親からが最も多く29.5%、父親からは24.2%、授業からは22.8%であった。6年生では授業からが26.8%、

母親からは23.8%、友だちからは23.2%の順に高い割合を占めていた。中学1年生では友だちが25.0%と最も多く、次いで母親が20.3%、父親が19.0%であった。中学2年生では友だちの割合が多くなり31.9%、先輩からは13.3%、母親・父親からは11.1%

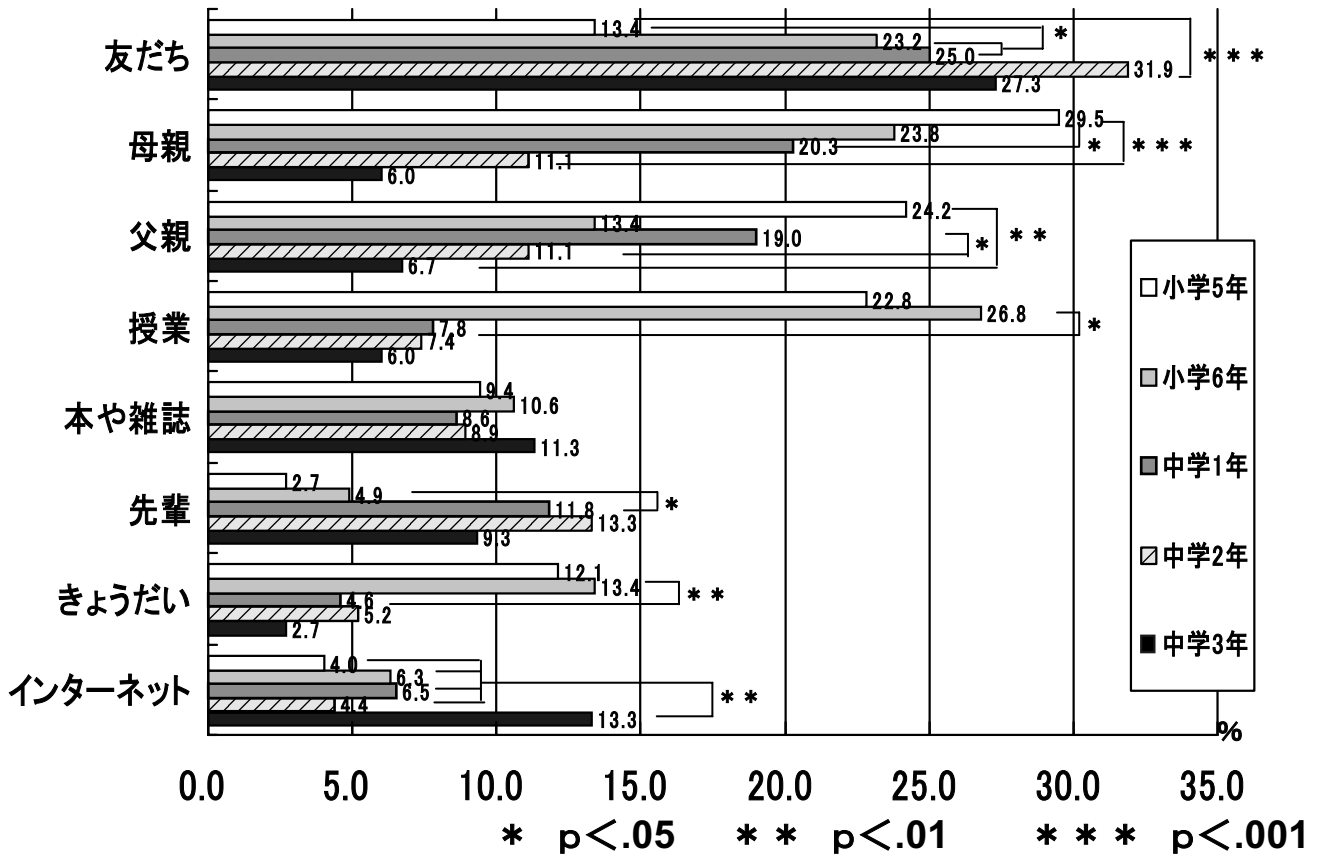


図9. 性に関する情報の入手源 (男子)

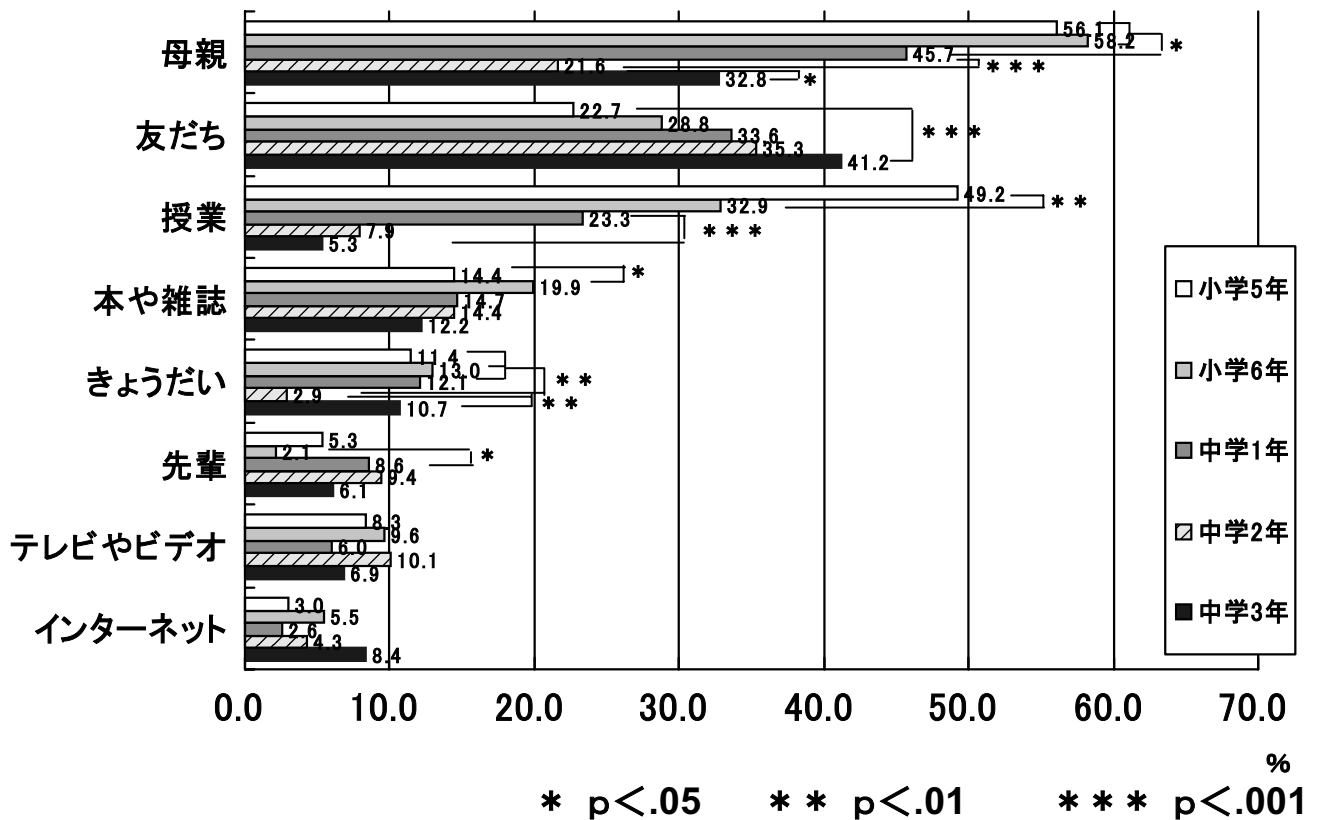


図10. 性に関する情報の入手源 (女子)



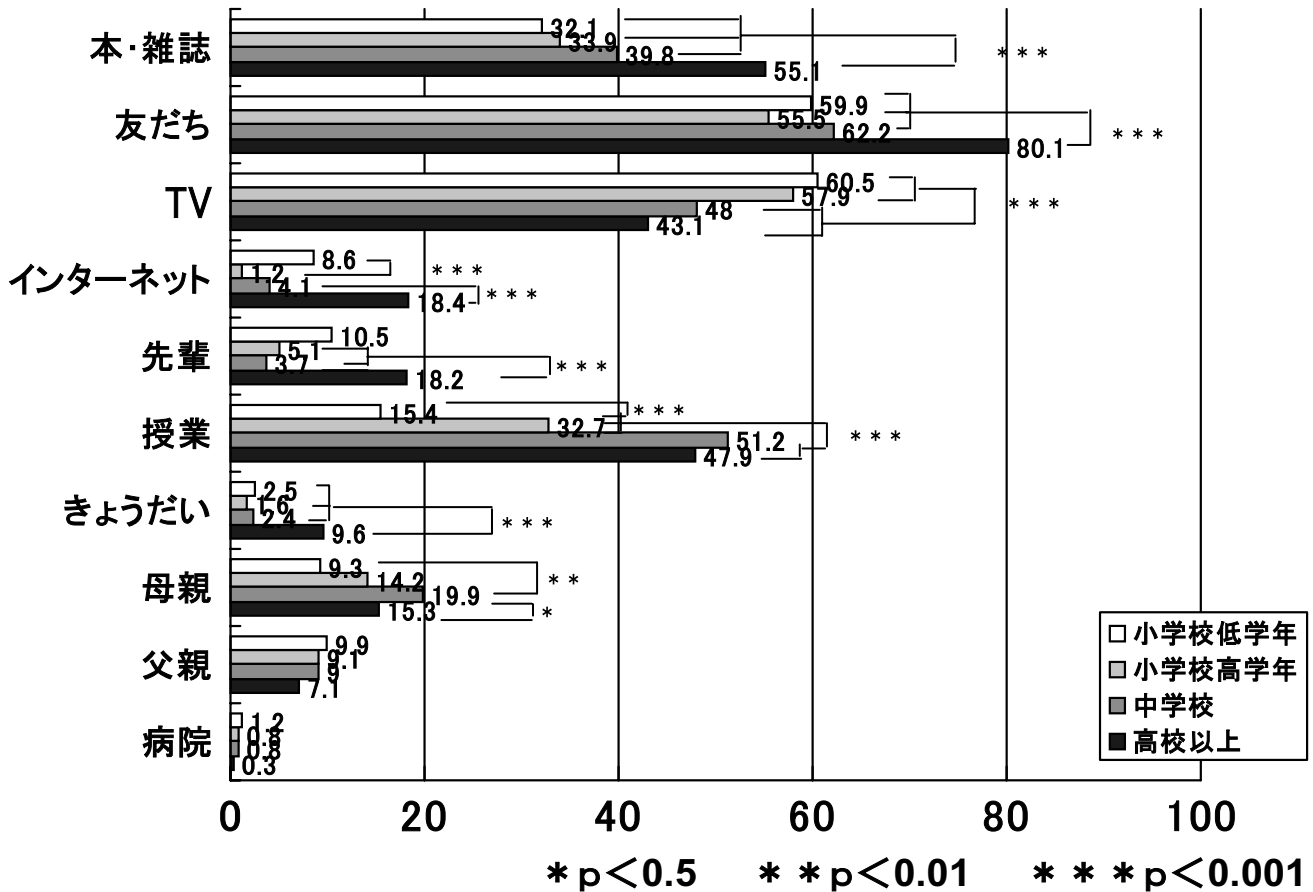


図11. 親が考える子どもの性情報の入手源（第一子の年代別）

であった。中学3年生になると友だちが最も多く27.3%、次いでインターネットが13.3%、本や雑誌が11.3%となっており、年齢とともに性に関する情報の入手源が異なっていた。

2) 女子の性に関する情報の入手源 (図10)

性に関する情報の入手源は5年生の女子は母親からが56.1%と最も多く、授業からは49.2%、友達からは22.7%であった。6年生でも母親が58.2%、授業からは32.9%、友だちからは28.8%の順となっていた。中学1年生でも母親が最も多く45.7%で、ついで友だちからが33.6%、授業からが23.3%であり、中学生になると授業の割合と友だちからの情報の割合が逆転していた。中学2年生になると、男子と同様に友だちからが35.3%と多く、母親からは21.6%、本や雑誌からは14.4%で、授業の割合が7.9%に減少していた。中学3年生では友だちからの割合は男子よりも多く41.2%であったが、母親からの割合も多く32.8%、本や雑誌からは12.2%であり、授業はわずか5.3%であった。

3) 親が考える子どもの性情報の入手源 (図11)

親が考える子どもの性情報の入手源は、小学校

低学年の親はテレビが60.5%、友だちは59.9%、本や雑誌が32.1%の順に多く、高学年の親もテレビが57.9%、友だちが55.5%、本や雑誌からが33.9%と回答していた。中学生の親は友だちが62.2%、授業からが51.2%、テレビが48.0%の順に多いと考えていた。高校生の親は友だちが80.1%、次いで本や雑誌が55.1%、授業が47.9%と考えていた。

4) 教師が考える子どもの性に関する情報の入手源方法 (図12)

小学校教師は、子どもが性に関してテレビ・本や雑誌が90.6%、友だちが80.2%、インターネットが63.5%の順に情報を得ていると考えていた。中学校教師は友だちが93.8%と小学校教師より多く (p<.05)、テレビを性に関する情報の入手先と考える教師は70.8%で小学校教師より少なかった (p<.001)。本や雑誌からが87.5%で、小学校教師との有意差はみられなかったが、インターネットが81.3%と小学校教師よりも多かった (p<.05)。教師は親と同様にテレビ・本や雑誌、友だちから情報を得ていると考えていたが、インターネットから情報を得ていると考える教師が多く、親と相違がみられた。

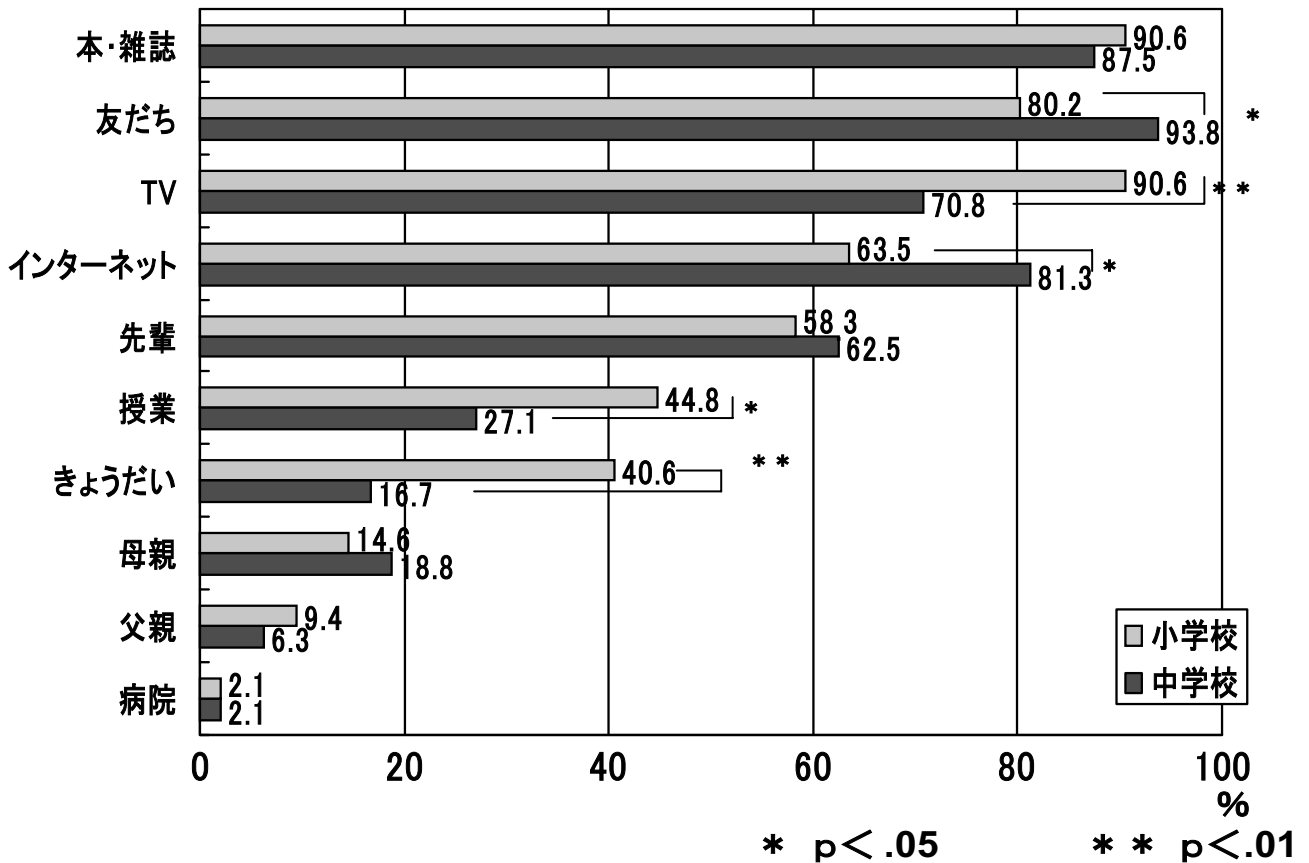


図12. 教師が考える子どもの性情報の入手源

考 察

1. 性に関する親子の会話からみる家庭での性教育の現状

男女とも年齢が高くなるにつれて性に関する会話を家族としなくなるが、特にその傾向は中学2年生を境にして顕著であった。しかし、それまでは男女ともに母親との会話は多くみられており、中学1年生までの子どもにとって母親は性に関する情報源といえる。しかし、その母親は子どもと性についての話しをしているとの意識は低く、子どもは本や雑誌、テレビや友だちから性の情報を得ていると考え、子どもとの間に意識の隔たりがみられる。このことについては、子どもからの性に関する相談が一時的であったり、質問の内容があいまいな表現であることなどから、親にとっては性の話と捉えられないことが多い<sup>10)</sup>といったことや、今回の調査に回答した保護者の年代が受けてきた性教育が、女子だけを対象にした初経指導が中心<sup>11)</sup>であることを考えれば、親自身が子どもからの性についての問いかけや親自身の対応を性教育と意識していないことが考えられる。また、性に関する話を子どもがした場合、母親は男子に対しては「話題を変える」「適当に嘘を言う」

「大きくなったらわかる」と答えている場合が多く、女子に対しては「まじめに本当の話をすると答えた場合が多いという報告<sup>8)</sup>などから、性の異なる男子の場合は母親と、性に関する話をしなくなることも考えられる。

女子では、母親と性の話をする割合は、小学校5,6年生、中学1年生では約85%、中学生2,3年生では約70%と高い割合を占めてはいるが、学年と共に減少している。これは小学生の女子の性に関する興味は「思春期に関すること」や「初経」が最も多く、ついで「性交」「エイズについて」であり<sup>12)</sup>、中学生になると「性感染症」や「性交」「男女交際」<sup>13)</sup>といったように、子どもの興味がからだに関することから男女関係に変化していくのに対し、小学生の親が子どもに教える内容は「男女のからだの違い」や「二次性徴」が高い割合を占め、「性感染症」や「性交」の話題は少ない<sup>10)</sup>。といったことによるものと考えられる。また、中学生の親では、性に関する会話は初経指導が中心で、中学生の女子が望んでいる内容とは大きく異なる<sup>8)</sup>といったことから、中学生になると性に関する情報源として母親を選ぶ割合が減少するものと考えられる。

近年、姉妹のような母娘が増加したといわれるが「性・異性関係について」の会話は気軽に話せないとの報告<sup>14)</sup>もあり、今回の調査でも母親自身が子どもにとって性の情報源であると考えている割合は少ない。

子どもは、性に関する情報や知識を母親からの得たいという気持ちはあるが、母親はそれに対して十分に対応が行えていないことがうかがえる。

## 2. 子どもを取り巻く性情報環境

初めてのデート経験の平均年齢は男女とも14.5歳<sup>15)</sup>との報告もあり、男女交際のあり方や性行動についての早期教育の必要性を痛感するが、中学生になると家族と話をしない者が増え、学校の授業から情報を得る者も急激に減少している。このような実態に対して小学校教師は子どもたちの44.8%は授業から性に関する情報を得ていると考えており、中学校教師は27.1%と考えてる。中学校教師の回答から中学校で行われている性に関する授業が子どもの実態に見合っていないと考えている教師が多いことを示唆するものである。子どもの性情報の入手源は小学生の間は母親、授業であるが、中学生になるとそれらと入れ替わるように増えるのが友人からの情報である。子どもたちによく読まれているものは「男子はマンガ、女子はファッション誌」だとの報告がある<sup>15)</sup>。齋藤らは高校生の購読頻度の高い雑誌の性に関する記載を調査し、それらの雑誌には「興味本位の性描写」や「SEXの体験談」が多くのもせられており、「性衝動をあおる」描写で医学的信憑性の低い内容であることを指摘している<sup>16)</sup>。このように友だちの間の情報源は雑誌やコミック誌であり、これらに描かれている恋愛や性描写では、性において男性が攻撃的、女性は受動的といったステレオタイプのジェンダーバイアスに基づいた性差別的な考えが強く、恋愛即性交といった恋愛観であり<sup>17)</sup>、子どもたちが健全な性意識を形成することを妨げるものであると考える。今回の調査結果からも、親や教師の多くが、子どもは友だちや本・雑誌から性情報を受け取っていると考えており、危険な状況に置かれていることを認識している。しかし、このような実態に見合った十分な指導を実施していないということは、現代の子どもたちを取り巻く商業的な性情報環境を容認しているのものであるとも考えられる。

一方、中学生や高校生の親の約半数は、授業から子どもが性情報を得ていると考えているが、子どもたちは中学生になると授業から性情報を得ていると回答した者は1割にも満たず、大人と子どもの間に

は大きな認識のズレがある。石沢ら<sup>18)</sup>の調査では中学生の親の60%が学校で行われている性教育の内容についてはだいたい知っていると答えているが、齋藤ら<sup>16)</sup>の調査によれば、対象は高校生ではあるが、子ども達が雑誌に期待する内容としては「正しい避妊法」72.6%、「性感染症について」62.5%であったとの報告がある。しかし、実際には学習指導要領に基づけば、こういった内容は学校の授業では十分に扱われておらず<sup>19-21)</sup>、子どもが期待する性情報と授業の内容の間には隔たりがある。加えて、このような実態に対する親の認識はさらに低いものとする。

親や教師は、子どもがおかれている性情報環境とその実態に関心をもち、それが子どもたちのセクシャリティ形成にどのように影響するのかを真剣に考え、子どもたちの実態に合った性教育を家庭と学校の間で連携しあって構築し子どもの健全な育ちを支えていくことが必要である。

## 3. 母親に対する性教育の支援

小学校高学年の子どもにとって母親は性に関する情報源として選ばれているにもかかわらず、母親自身はそのように認識してはいない。このことは母親が子どもの性に関して知識が不十分なため子どもと性に関する話を避ける傾向がある<sup>22)</sup>といったことを示すものであり、性教育の講演を聞いた後では性交や避妊方法、人工妊娠中絶などについても説明できると答える親が増える<sup>23)</sup>ことからもうかがえる。また、母親は子どもの心身の変化を目のあたりにしながらも、自分の子どもの発育を遅く考え、対応を先送りしようとする傾向がある<sup>24)</sup>との報告もあり、母親が性について学ぶ機会を持つことは重要であるとする。学校では、年に数回授業参観後に保護者懇談会があり、その際に講演会を企画するなど、また生涯学習の一環として家庭教育がどの学校でも設けられているが、このような機会をとらえ、親が意識的に性に関して学ぶ機会を設けることが必要であるとする。そうすることで、母親と子どもの日々の会話の中で性に関する事柄が増え、子どもの心身の変化が現れた際に機を逃さず性教育を行えるようになると思われる。

## 4. メディア・リテラシー教育の必要性

高校生の性知識と情報源の調査によると、排卵の時期や人工妊娠中絶が可能な週数、避妊などの望まない妊娠を防ぐ項目の正解率は低く、このような情報源は友だちや先輩からが中心である<sup>25)</sup>。本調査でも、中学生になると性の情報源は母親や授業からではなく、女子では圧倒的に友だちからとなり、男子

では、年齢が上がるにつれ、情報源は友だち、そして本や雑誌、インターネットといった商業主義的なものに移行している。商業主義的な性情報は不正確なもの、さらに恋愛至上主義で恋愛即性交といったように子どもの性行動をあおるものが多く<sup>17)</sup>、そういった情報を共有しあい、無批判に理解していくことは、子どものセクシャリティー形成を貧困にすると考える。文部科学省では情報化社会を生きる子ども達に必要な能力の育成として「メディア・リテラシー教育」を進めている<sup>27)</sup>が、メディア・リテラシー教育の重要な視点としては、メディアをクリティカルに理解することをねらう<sup>28)</sup>ものであり、今後、さまざまな情報の中で生きる子どもたちが、性を始めとする情報をクリティカルに理解する力をつけていくことは重要であり、性情報に関する課題をメディア・リテラシー教育でも取り上げていくことが必要であると考えられる。

## 結 論

本研究は、子ども達の実態にあった性教育のあり方を検討するために、石川県A町の小学校5,6年生と中学生、その保護者、及び小中学校の教員に性に関する意識調査を行った結果、以下のようなことが明らかとなった。

1. 思春期の子どもは学年が上がるにつれて性に関する話を家族としなくなり、その傾向は男子の方が顕著である。また、小学生の間は性の情報を親や授業から得ているが、中学生になると友だちから得る割合が増える。
2. 性の話を意識的に行う親は小学生の場合は1割程度であるが、子どもが中学生になると約3割に増え、女子の親の方が、子どもが小学校高学年、中学生の年齢では性の話を子どもとしている。また、親は子どもたちが性に関する情報をテレビや友だち、本・雑誌から得ていると考えている。
3. 教師は子どもたちが性に関する情報を友だちや本・雑誌、テレビ、インターネットから得ていると考えている。

以上から、性に関する親子の会話では、子どもの認識と親の認識にズレがみられた。また、性情報の入手方法においても親や教師と子どもの間には認識のズレがみられた。子どもの実態にあった性教育を行うためには、性に関する会話が成立する小学生の間から、親や教師が意識的に子どもに性について話すことが必要であることが示唆された。

## 文 献

- 1) 財団法人日本性教育協会：「若者の性」白書第6回青少年の性行動全国調査。小学館，pp 26-35, 2007
- 2) 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会：2005年調査児童・生徒の性 東京都小学校・中学校・高等学校の性意識・性行動に関する調査報告，学校図書，pp 90, 2005
- 3) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課監修：母子保健の主たる統計，2002
- 4) 平岡友良：当院における若年妊娠・分娩について，思春期学 22: 143-148, 2004
- 5) 性教育のあり方小委員会：思春期における性教育のあり方，思春期学 27: 351-360, 2009
- 6) 望月善子，渡辺博，大石曜，他：当院における10代妊娠の臨床統計，思春期学 22: 404-409, 2004
- 7) 戸田稔子，河野美江，比良静代：若年妊娠の臨床的検討～リプロダクティブ・ヘルスの立場から～，思春期学 22: 392-397, 2004
- 8) 齊藤益子，木村好秀，宍戸章子：中学生をもつ親の二次性徴発現時の子どもへのかかわりおよび性に関する子どもとの会話に関する検討，思春期学 23: 154-160, 2005
- 9) 町田江美，上原里程：小学生とその保護者の性に関する意識および行動の違い，思春期学 24: 492-497, 2006
- 10) 波川京子，林猪都子：小学校6年の児童と両親の性に関する親子の会話，母性衛生 40: 464-467, 1999
- 11) 鹿間久美子：わが国における性教育の振り子論－第二次世界大戦以降を中心にして－，思春期学 26: 350-359, 2008
- 12) 林猪都子，波川京子：児童と両親の性教育に関するニーズの相違，母性衛生 41: 266-270, 2000
- 13) 剣陽子：若者が望む性に関する情報についての質問紙調査，思春期学 22: 423-429, 2004
- 14) 山地佳代，白石裕子，松浦賢長：家庭における性教育の可能性に関する検討，母性衛生 43: 549-554, 2002
- 15) 全国図書館協議会：第54回学校読書調査報告書，学校図書館 697, 2008
- 16) 齊藤益子，根子寿枝，木村好秀：高校生の購読頻度が高い雑誌の情報と彼らがそれに期待する内容，思春期学 24: 345-351, 2006
- 17) 浅井春夫，杉田聡，村瀬幸浩：生の貧困と希望としての性教育，十月舎，PP 60-79, 2009
- 18) 石沢敦子，矢島まさえ，佐光恵子，他：思春期における子どもの性教育のあり方－中学3年生の家庭における性教育の現状と課題－，群馬バース学園短期大学紀要 6: 3-11, 2004
- 19) 文部科学省：学習指導要領小学校体育，2009
- 20) 文部科学省：学習指導要領中学校保健体育，2009
- 21) 文部科学省：学校における性教育の考え方，進め方。ぎょうせい，1999
- 22) 丹羽さゆり，水谷聖子，大橋裕子，他：中学生を持つ保護者の性知識と性教育に対する意識，中部大学生命健康科学研究所紀要 創刊号: 33-40, 2005
- 23) 森田薫，齋藤益子，木村好秀：中学生の親の性知識に関する検討－講演前後の知識の変化－，思春期学 24:

- 168-175, 2006
- 24) 三浦陽子, 嶋田紀膺子: 小学6年生の長子に対する母親の性教育に伴う思い-「母親の語り」の分析をとおして-, 母性衛生 51: 119-126, 2010
- 25) 光本恵子, 番内和枝, 久保田君枝, 他: 高校生の性知識と情報源に関する調査, 思春期学 22: 353-359, 2004
- 26) 文部科学省中央審議会初等中等教育分科会教育課程部会審議報告, 2006
- 27) 佐賀啓男: メディア教育概念の変遷, メディア教育研究 1: 167-183, 1998

**The investigation into sexual problem for children in adolescence (Part 1)  
- conversation about sex between parents and children,  
and the way to get the information about sex -**

Yumiko Takemata, Rumiko Kimura\*

**Abstract**

This study conducted a survey of public perception to discuss sex education among the current adolescents and adults. Subjects are adolescents who are in the fifth and sixth graders of a elementary school and junior high school students, their parents and teachers from the elementary schools and junior high schools from one city of Ishikawa Prefecture.

The survey revealed that adolescents have a tendency not to discuss this issue with their family as they become older, and it is particularly prominent among male students. However, about 10 percent of the parents who have elementary school children think that they talk about this matter consciously, and this rate is less than 30 percent for the parents whose children go to junior high school. If the children are in a higher-grade at elementary school and junior high school, the parents of the female students have more tendencies to talk about sex.

The elementary school children get most of the information from their parents and teachers, and junior high school students get them from their friends rather than parents. However, parents think that children get the information about sex from their friends, TV program, books and magazines. Teachers think that children get the information about sex from their friends, TV program, internet, books and magazines. But few children get the information from internet.

As mentioned above, there are perception gaps between children and their parents about the conversation and how to get the information.